

私たちの活動や意見を
仲間で共有します
会費は県と日本平和委
員会の活動も支えます

土浦平和の会ニュース

発行：土浦平和の会
事務局：土浦市鳥山2-530-
296
ホームページ：//heiwatutiura.
web.fc2.com/

9条改憲発議を許さない為に 3千万署名を集め切ろう！

署名進捗大幅な遅れ

今通常国会で安倍首相が強調する「憲法9条に第3項を新設し、自衛隊を明記する」改憲発議を許すなど、昨年10月に、「安倍9条改憲NO!市民アクション」が著名人19氏によって立ち上げられました。そして、具体的には、全国で3千万の署名を集めることが提起されました。これに呼応した団体が各地で署名行動を展開しています。土浦平和の会も会員の皆様に20筆の集約をお願いしています。しかし、進捗は遅く、未だ百数十にとどまっています。当面、ニュースに同封した署名用紙にて、各自5筆の集約をぜひともお願いします。事務局長・近藤(080-1987-4050)にお電話いただければ取りに伺います。

池田香代子氏が訴え

昨年12月12日、上記運動の「オール茨城キックオフ集会」が水戸市で開催され、ドイツ文学翻訳家の池田香代子さんが講演しました。要旨を紹介します。

市民の力が全体主義を阻止する

今は、人のために何かをしようとする人が少なくなっている。電車の中でも席を譲らない若者が多い。私は70歳になるが、私より年上だと判断したら譲ることにしている。「情けは人の為ならず」と言うが、人に優しくできることは、結局自分に還ってくるもの。でも今は人と人が分断されている。想像力が及ばない社会。全体主義の世の中だ。このような中では憲法の改悪を阻止するのは容易でないと思う。

先の通常国会で生活保護費が切り下げられた。もっと低い収入で生活している階層があるからという理由だ。全くおかしい。そもそも日本の生活保護の捕撈率（本来受けるべき人たちの中で受給が認められている人の率）は20%という学者もいる。本当にこの国の政府のやることは本末転倒のことばかり。

「憲法的一条一条には、過去の不正義との戦いが刻み込まれている。」（ユルゲン・ハーバーマス『事実性と妥当性』）

ドイツのメルケル首相の支持率が落ちている。難民を受け入

れすぎたというのが批判の理由だが、メルケル首相はドイツの憲法に従った政治をただけなのだ。ドイツ基本法第16a条は「政治的に迫害されている者は、庇護権を有する。」というもの。彼女はこれに従って行動したのに、批判の対象となった。今、世界には、保護（保守）主義がはびこっている。自分さえ、自国さえ良ければそれでいいという考え方。この条文は、第二次世界大戦でドイツが犯したことへの各国への詫び状条文でもある。彼女は東ドイツ出身なので西ドイツ出身の政治家よりも平和や平等への思い入れが強い。結局20万人まで受け入れることで合意された。日本はわずか十数人。この違いは何？

ICANがノーベル平和賞を受賞した。長年、核兵器禁止・廃絶を訴えて運動してきた、被団連・被団協の人たちから見れば、何で私達でなく10年程度の運動体のICANなんだと思う人もいるようだが、ちょっと考えてみる必要があると思う。ICANはロビー活動、つまり各国の大統領や首脳、国連に直接訴える等の活動をしてきた。この方法論は見習う必要があるのではないか。私たちの運動にも関係すると思う。

先日、新潟市民連合の事務局

長さんと話をする機会があった。あそこは強い。参院選、知事選、総選挙と市民共同の候補を当選させてきた。何が強さの要因なのかと聞いたら、すべての市民運動に無駄はない、この市民運動をいかに結集して最大限の力にしていくか、そこが大事ということであった。

「人は強制収容所に人間をぶちこんですべてを奪うことができるが、たった一つ、与えられた環境でいかにふるまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない。」

「私たちが生きることから何を期待するかではなく、生きることが私たちから何を期待するかが問題なのだ。」（ヴィクトール・フランクル『夜と霧』）

「平和を乱すことがなされたら、それをした者だけでなく、止めなかった者にも責任はある…世界の歴史には、賢くない人々が勇気を持ち、賢い人々が臆病だった時代がいくらかあった。これは正しいことではなかった。」（エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』）

「全体主義の下では、私が私であることが壊される。それは、私の自発性が殺される、ということだ。」（ハンナ・アーレント『全体主義の起源3』）

全体主義に屈しない3つの方法

これは、NHKのEテレでも取り上げられた。今の日本は完全な全体主義社会。野党がいくら要求しても臨時国会は開かない。質問してもまともに答えず、論点をそらす。一握りの大富裕層を優遇する一方、大多数の庶民の貧困化を助長する分断の政策。このような全体主義の風潮の中で3000万署名を進めるカギになるのが、ハンナ・アーレントによる、全体主義に屈しない為の3つの方法だ。

①私たちは、いつでもまったく新しい、楽しい何かを始められるのだ、ということを忘れない（自発性を手放さない）。

—「北朝鮮のミサイルがこわ〜い」で終わってしまう人は既に自発性が奪われている。怖いならその怖さを払拭するためにどう行動したらいいかを考えることが大事なのです。

②人を信じる（全体主義的社会では、人を疑心暗鬼に陥らせ、互いを監視させる）。今は既に密告化社会になりつつあります。

③人とつながる（全体主義的社会では、人をばらばらに分断し、一部の人々を排除し、一元的に支配する）。政府の分断政策に乗ってはいけません。

人道支援の自衛隊ではない

マスコミ各社の世論調査を見ると、「憲法9条は変えない方がいい」という人が6割以上となるが、一方で、「自衛隊はよくやっていると思う」人も6割を超える。だから、9条3項に自衛隊を書き込むことに揺らぎ

が生じる。安倍首相はその心情を利用して巧妙に提案している。鬼怒川の決壊水害があったとき、イギリスのBBC放送は、自衛隊のヘリコプターによる救援場面で、「これは世界で最も多くの人の命を救っている軍隊です」というテロップを流した。まさに、安倍首相の戦略通りの放送内容であった。国民もその気にさせられている。だから、手ごわい。肝心なのは、その自衛隊ではない、世界に武器を持って進出する自衛隊なのだという観点が重要。自衛隊の活動の歴史をまとめたが、既に、多くの国へ派遣されていることが分かる。世界でも歓迎されている。人道支援だからだ。でも、今度の改憲問題は違う。安保法制下の自衛隊が憲法に書き込まれば、軍事面でのフリーハンドを与えることとなる。だが、市民にそこまでの説明は大変難しい。署名も困難を伴うと思うが頑張るしかない。（以上＝講演内容要約責任は編集部）

★全体主義とは：

個人の利益よりも全体の利益が優先し、全体に尽すことによるのみ個人の利益が増進するという前提に基づいた政治体制で、一つのグループが絶対的な政治権力を全体、あるいは人民の名において独占するものをいう。歴史的にはナチス・ドイツ、ファシスト・イタリアなどのファシズム政治体制があげられるが、スターリニズムや毛沢東主義などを含むこともある。一党独裁、政権の不誤謬性、議会民主主義の否定、表現の自由に対する弾圧、恐怖による警察政治、宣伝

機関の独占、経済統制、軍国主義という共通点がある。

(「コトバンク」より)

昨年総選挙で自民党が予想以上の議席を獲得したことで、麻生副総理は「北朝鮮のおかげ」と思わず本音を漏らした。安倍政権は北朝鮮の核開発、ミサイル発射や中国の海洋進出などを最大限利用し、「アメリカの財布」と化しての兵器の爆買い、共謀罪、集団的自衛権、戦争法、改憲へと「戦争する国」づくりに狂奔している。また御用メディアも動員し北朝鮮はとんでもない国だ、韓国、中国はけしからん式の強硬論や好戦的な世論づくりに余念がない。

こうした状況は戦前と同じ雰囲気だといわれている。日本を覆っている危険な方向に警鐘を鳴らし、戦争だけは絶対してはならないと主張しているのが「戦争の大問題—それでも戦争を選ぶのか」(丹羽宇一郎著

東洋経済新報社1500円)である。

著者の丹羽宇一郎氏は初の民間大使として2010-2012年まで、中国大使を務めた人物で、伊藤忠の社長も歴任した経済人でもある。

本書では、反戦・平和を大上段に構えるのではなく、戦場体験者の話を紹介しながら、戦場は人を狂わせる、戦場に出れば平気で非道な行為を繰り返す。戦争は国民を犠牲にする、特に弱い立場の人ほど犠牲になる。戦争とはいかにばかげたものか、日本は2度と戦争してはいけないと、過去の日本の侵略戦争の反省の上に立って、また大使としての体験から冷静に非戦を訴えている。

本書の冒頭で「戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが、戦争を知らない世代が政治の中枢となったときは、とても危ない。」と田中角栄元首相の言葉を引用している。

著者の心配はまさにそれである。戦争を体験している世代、戦争の真実を後世に語り継ぐ人も少なくなっている。学校でも現代史、特に侵略戦争の歴史などまともに教えないばかりか、侵略戦争、慰安婦問題や南京虐殺など負の歴史を矮小化もしくは正当化するような動きさえもある。

安倍首相はもちろん戦争体験はない。歴史の真実をまともに学んだことも、学ぶつもりもないようだ。それどころか戦後レジュームからの脱脚と称し、戦後、

日本が平和憲法のもとで育ててきた平和、民主主義を否定し、あの戦争は侵略戦争だと素直に認めようともせず、日本の戦後の在り方を根本から変えようとする偏狭なナショナリストである。

著者はリアルな戦争のイメージを持たなければ、人にリアルな戦争の真実を伝えることができない。戦争をなくすために大事なことは、まず戦争を知ることだ、我々はもう一度戦争を学びなおすべきだとし、日本がアジアを侵略したことや、日本軍による中国やフィリピンでの蛮行など戦争の実態を知る必要がある。そこから、日本は二度と戦争をしてはいけないという教訓を学ぶべきだと言い、現代史は日本人が学ぶべき最重要課題であり、戦争を知らず、知ろうともせず安易に戦争を口にするのは無責任、と厳しい。

負の歴史を学ぶことの意義は、戦争してはいけないということをも日本のみならず世界の共通歴史認識にしていくことにある。ヴァイツゼッカー元西ドイツ大統領の「過去に目を閉ざす者は、現在に目も閉ざす者となる」との名言が浮かんでくる。

我々は戦争体験はなくとも、歴史の真実を学べることができる。歴史から教訓を引き出すこともできる。戦争の悲惨さを想像することができる。そこが安倍一族との違いである。

いま、北朝鮮をめぐっては米朝韓の軍事的緊張が高まっている。軍事的衝突が起こったらとんでもないことになる。北朝鮮も米国も核を持っている。核兵器が使われるようなことになったら日本、韓国で200万の犠牲者が出るともいわれている。戦争だけは絶対避けなければならない。著者は北朝鮮核問題では、力対力から人と人、話と話へと6カ国協議へ小さな一歩を踏み出すべきだと言う。

いま、北朝鮮をめぐっては米朝韓の軍事的緊張が高まっている。軍事的衝突が起こったらとんでもないことになる。北朝鮮も米国も核を持っている。核兵器が使われるようなことになったら日本、韓国で200万の犠牲者が出るともいわれている。戦争だけは絶対避けなければならない。著者は北朝鮮核問題では、力対力から人と人、話と話へと6カ国協議へ小さな一歩を踏み出すべきだと言う。

本書の「終わりに」で「じっとしては何も変わらない。今よりどんな小さくとも一歩前に踏み出す。すると今までと景色が変わる。そこから我々一人一人の人生が、世界がまた始まるのだ。前へ一歩」と締めくくっている。意味のある一節である。

(近藤輝男)

リレー随想

歴史を学び

歴史に学ぶ